

平成二十二年十二月十九日

「東京de寺子屋」(第四十一回)

「いのちささぎげて——戦没学徒の思い」

(株)寺子屋モデル 代表世話役 山口 秀範

一、松吉正資(東京帝大学徒出陣・沖縄特攻戦死・二十三歳)

自分がかねがね冬一度長門峡(註 山口県中部の名勝)へ行つて見たいと思つてをつたので長門峡行を提議した。そこで汽車の時間を見てもう一寸しか時間がない。大急ぎで仕度して駅にかけつけ丁度間に合つた。長門峡に着いて見ると優に一尺は積つてをる。自分としては生れて始めての大雪であつた。

雪の中を一条の道がついてをる。それを辿つて長門峡の入口の丁字川のへりまで来た。此処から先は道がついてないから勿論人の足跡もない。数歩あるいて見たが自分は服に袴をつけ下駄ばきといふいでたちであるし、宝辺、加藤両兄とて仕度をしてをらぬからとても先へ行けるものではない。それで探勝はあきらめて川べりの宿屋に上つた。丁字川に面した二階の部屋に通され障子を開けはなつたまゝ雪見酒を傾けようといふ趣向である。

女がまだ何かおとりになりますか、といふから何か持つて来いといふと今度は牛肉やら玉葱のきざんだのやらを持つて来た。火鉢に鍋をかけてすき焼をやらうといふのである。昨日は寮ですき焼をやつてくれて鰹腹食つたが二晩つづけてすき焼が食へようとは思はなかつた。これは有難いと汁まで残さず食つた。最後に鯉の吸物。

一人平均六七合は飲んだらうか。相当酔つて来て萬葉の歌をうたつてをると女が萬葉はいゝですわといふ。うん萬葉はいゝ金槐集もいゝと言つてをると金槐集を持つて来ませうかといつて立つて行つたが萬葉集、金槐集、古今集を持つて来た。女の名は静子さんといふ。いい本があつたら送つて下さい金は送りますからなどといふ。名刺をやつたり加藤兄は本の裏に自作の相關歌を書きつけたりしてをった。静子さんには東京へ帰つてから『新指導者』を二部送つてやつたが、つい先日そのお礼のつもりだらう小包で餅を送つてくれた。

さて相当以上に酩酊して二人が泊らうといふのを自分は是非とも帰ると言ひはつて、ぢや一しよに帰らうといふので三人宿を出たが駅へ行く途中、宝辺兄はわざと雪の上へ転がるのでそれを加藤兄と二人でひきおこしてやつと駅まで辿りついた。やはり一番酔つてゐたのは宝辺兄だつたらしい。山口に着いてからも街路で刑事につかまつたり、寮へ帰つて皆の前でクダをまいたりした。

なつかしきふるさとの浦船出してみ橋とゆく日近づきにけり
 たづね来る友もなければひとり居てその日を待たむさびしけれども
 また会ふと知られぬ友のみなさけをしみじみおもふこの時にして
 数ならぬわれを上げます友どちのなさけにこたへいさみてゆかむ
 大君の大みめぐみと友の恩おもへばこの身惜しからぬやも

述懐

ゆく身にはひとしほしむるふるさとの人のなさけのあたゝかきかな
 数ならぬ身にはあれども吾を送る人のおもひにこたへざらぬや
 うつそみはよし砕くともはらからのなさけ忘れじ常世ゆくまで

二、一條浩通（盛岡商業卒・ルソン島戦死・二十二歳）

書翰から 諸君等の、入營を目前に控へ死を決して合宿してゐる有様、心情を、今
 現実と感じられます。「生死を分たず」といはるゝ強き言葉が想起せしめられる事と思
 ひます。親鸞によれば、死こそ生の全き進行と仰せられて居ります。実に不倦怠無畏怖
 意志を振起せしめられる言葉です。生を現実化せしめんと戦ひ居る諸兄よ、信疑を決す
 べし。死を決せよ。そは生の全き進行である。最後まで、此の世に一語にても多き生あ
 る言葉を遣し給へ。（昭和一八・七・一一）

故郷の母より菓子送り来る

楽しきは母の賜ひし小包をためつすがめつひもとくとき
 わが好むくさぐさの菓子を故郷の母はえらびて送り給ひぬ

母よりの送り来ませる包には餅もまじりぬ正月なれば（昭和一五・一・一四）

三、池田正一（高等師範学校志望・結核病没・十八歳）

長期戦論に晏如たるが如き、又、私達が学んで来た世界歴史のど
 こに百年戦争の勝利が明記されて居つたでせうか。実に百年戦争は人類の愚昧以外の何
 ものでもないではありませんか。畏くも「速ニ禍根ヲ芟除セヨ」と詔あらせられます
 を拝し、又「はやくはらへ」と祈らせ給ふ大御心を仰ぎ奉るだにも、長期戦論は遠勅な
 ることを痛憤致すのであります。その責任はかゝつて私達の責任でなくして何でありま
 せう。不忠懺悔求道精進背私向公のみが私達に残された唯一の道なることを確認致すの
 であります。青年こそは時代の決定者です。

長期戦論かしましく日ごとくにつのるぞくやしき

うつそみの身は病めるともをごころのはやりたかなり憤ろしき

りんご

うるはしき二つのりんご手にのせて友らのあつきみ心偲びぬ

つややかに光るを見れば何となく心なごみて涙こぼるゝ

友どちのみ心こもるりんご二つ神のみまへにそなへまつりぬ

四、茶谷武（中央大夜間部学徒出陣・ルソン島戦死・二十四歳）

父上

母上 様へ

武モタウくオ役ニ立ツ時ガ参リマシタ。生ヲ禀ケテ二十余年唯ノ一度モオ心ヲ安マセ
ルコトナク過シテ来タコトヲオワビ致シマス。今ノ私ノ氣持ハ吉田松陰先生ノ「親恩フ
心ニ勝ル親心今日ノ訪レ何トキ克蘭」ト歌ハレタ氣持ソノママデアリマス。今思ヒマ
スニ人一倍子ボンノウノ父上ニトツテコレヲヨマレルノハドンナデアルカハ、ヨシ全部
デナクテモオシハカルコトガ出来マス。デモ此ノ皇国危急ノ秋私達ノ涙ハカクサレネバ
ナリマセン。私ノ肉体ハココデ朽ツルトモ私達ノ後ヲ私達ノ屍ヲノリコエテ私達ヲ礎ト
シテ立チ上ツテクル第二ノ国民ノコトヲ思ヘバ又之等ノ人々ノ中ニ私達ノ赤キ血潮ガウ
ケツガレテキルト思ヘバ決シテ私達ノ死モナゲクニハアタラナイト思ヒマス。
日本ニ生レタ者ノミニ許サレル永遠ノ生ニ生キルトイフコトガイヘルノデス。
之等ノ事ヲ思ヘバ私達ハ涙ヲ流ス前ニ故国ノ勝利ヲ、天壤無窮ヲ祈ラネバナリマセン。
ドウゾ私ノコトヲ笑ツテホメテ下サイ。武モ笑ツテ散リマス。デハ父上母上オ身体ヲ大
切ニシテ下サイ サヨウナラ

武ヨリ

ワガ生ハ下葉ノ露ト消ニルトモ何カ惜シマンコノ秋ニシアレバ

我ガ肉ハヨシ朽ツルトモアガ魂ハミ空カケ御国守ラン

征キ征キテ草ムス屍ト果ツルコソ我身ニツキヌ思ヒナリケレ

神州ノ不滅ヲ信シ言ハ唯ニマケノマニマニ進ミ行キナム

大君ノマケノマニマニ生キ死ナム時ゾ近ヅキ吾ガ胸ハルル

同胞之働キミテハ日ニ夜ニモダシ心今ゾハルルモ

アガ家ノ名ヲケガスナトノタマヒシアガ父ノ言ヲスレカネツル

